

Building lifestyle around Ferrari

世界観に対する対価の行方

プロサングエに296GTBおよびGTS。フェラーリから矢継ぎ早に届くトピックにより
今号の誌面も充実したものとなった。しかしその一方で……。

フェラーリが変革の時を迎えていることは、既に皆様も感じていることだろう。フェラーリ史上初の量産プラグインハイブリッドであるSF90ストラダレがテクノロジーで、そして前後して登場したローマがデザインで、それぞれ新時代を引き連れてきた。その両方を受ける形で登場した296GTBおよび296GTS、そして、フェラーリ初の4ドアモデルとして登場したプロサングエ。その両車が今号の中心となったわけだが、フェラーリも生き残るためにやれることは全てやってきた……と実感することが多かった。それをリアルタイムで見られていることは、まさに編集者冥利に尽きるものだ。

しかし前号を見返すと、プロサングエを"フェラーリ初のSUV"と書いてしまっているのは素直に反省したい。次ページからのレポートでもあるようにプロサングエはフェラーリの定義ではSUVではなく、もちろん当初噂になった"FUV"でもない。正解は前段でも書いたように"フェラーリ初の4ドア"だった。自然吸気V12(!)を採用することからもわかるように、事実上のGTC4ルッソ後継車となり、GT系のトップモデルに位置する。価格は39万ユーロとされ、この原稿を書いている時点の為替レートで約5600万円とこちらもトップクラスだ。

しかしこれを高いと書くか安いと書くか、日本では難しくなってしまった。欧米の物価が日本のそれと違いすぎるからだ。これ以上は経済の不勉強を露呈してしまうので避けるが、なぜこの話を持ち出したのかと言えば、本誌の定価設定についてかなり悩んでいるからである。お気づきの方もいらっしゃると思うが、そして本来なら前号のここで書くべき内容なのだが、本誌は前号から定価を2860円から2980円に改めさせて頂いた。主たる理由は印刷費、紙代を始めとした各種コストの高騰だ。読者の皆様にはご負担をおかけして申し訳ないが、これまでであれば、ある程度はコストダウンで調整してきたと思う。事実、今回も8ページ減らすことでバランスをとっている。実は紙も変更したのだが、逆にこれは以前の紙よりも価格が高いもの。私が担当する別シリーズ『スクランブル・アーカイブ』で使用していて、印刷の発色やクルマのディテールの見え方がよかつ



たので、これを機会にこちらに統一した次第だ。

そこで落ち着いた2980円という定価だが、これでもまだ安いのではないか、という意見もある。3000円近い雑誌(ムック)は私が編集長に就任した10年前はまだまだ少なかったが、気がつけば周囲の定価が上がっており、だいぶ本誌に近くなってきた。ご提供している世界観に対する対価=定価をどう決めるべきかは、非常に難しい問題だ。"いいものをできるだけ安く"という日本人が得意、美德としてきた価値観の中で四半世紀会社勤めをしてきたので、どうしても安いほうを選びたくなくなってしまふ。もちろん元々3000円近い定価を安いと思ったことは一度もないが……。

なかなか結論の出ないこの悩みであるが、読者の皆様にご満足頂くことが大前提となるので、もちろん誌面に関しては今回もフルスイングさせて頂いた。左ページに記したような新企画もスタート。冒頭に挙げた2台以外にも注目トピックが多いので、"定価に見合うだけ"ご満足頂ければ幸いです。



文 平井大介
text by Daisuke Hirai

写真 フェラーリ/藤井元輔
photographs by Ferrari S.p.A. / Motosuke Fujii